風の末裔シリーズ・2nd シーズンの5

～カタカゴ　星空の向こう　～

新月の漆黒な夜。今日は星もない。雲が厚いんだ。
「雨が降らなければいいけれど…」
湖の巫女は、何時ものように湖畔のお堂の前に篝火を焚きながら、重苦しい空を見上げた。
蒼の里からの術者の説法は今回で最後だという。彼女の奉る湖の大ナマズは、晴れて水神となるのだ。
お堂の横には、小さな庵が新たに建てられていた。家族と生活のサイクルが違ってしまった娘の為に、父や兄達が普請してくれたのだ。
あの家族の元で幸せな娘として暮らす道の方が広かった。しかし自分の選んだ道は、…やはり薄くではあるが、血が導いた運命の上にあった。そしてそれに満足している。
感謝すべき育ての家族には、己の精進でいつかきっとご恩返しが出来る……そう信じている。
「ナニ、カンガエテル…?」
気付くと湖面に大ナマズが浮上して来ていた。
「人間の家族の事を考えていました、主様」
「サビシイノカ…?」
「いえ、主様がいらっしゃいますし、蒼の里との交流もあります」
「ニンゲンハ…オマエラ…」
「主様、信心は一朝一夕に得られる物でもありません。説法にもあったではありませんか。静かに護っていれば良いと」
「……」
湖の畔に来た巫女の家族を、主は水底から見た事がある。確かに巫女は愛されているのだろう。しかし彼等の世界に巫女の立ち位置が無いのは分かった。
空に十字の光が走り、草の馬が水色の髪の青年を乗せて降りて来た。
「待ちましたか?」
「いえ、カワセミ殿。……??長様…?!」
青年の後から、一回り大きな馬が、群青色の髪の背の高いヒトを乗せて降り立った。
「今日で最後という事で、私も主殿にご挨拶に参りました」
蒼の長は涼しげな声で言い、大ナマズに向いて一礼した。
「オオ、アオノオサドノ…」

何回かこなしているのでカワセミも慣れたものだった。
最後の説法を語り終えて、大ナマズに大地と風の護りを授け、カワセミは初の大仕事を終えた。
「オサドノ…」
晴れて水神となった大ナマズは、湖に帰る前に蒼の長に目配せした。何か察した長は、カワセミと巫女に外すよう促して、主に近付いた。
「イマハ、マダ、シノゲルガ、ジキ、フユガ、クル。ミコノ、ミガラヲ、ナントカデキヌカ…？」
主は、自分が切っ掛けで、人間の懐から人外界に足を踏み入れてしまった巫女を案じていた。心はこちらの者だが、身体はひ弱い人間なのだ。
長は目を細めて静かに答えた。
「我らも思案しております。主殿の心裂き、感謝致します」
主は水底に沈み、草の馬は帰り支度をする。
「カワセミ…？」
水色の髪の青年は、鐙(あぶみ)に手を掛けたまま何故か止まっていた。目の前の物ではない、何処とは無しの一点を凝視している。こういう時この青年は、何かの流れを感じているのだ。
「カワセミ？　何か…？」
「…長……定かではないけれど……今晩このまま巫女と別れちゃダメ…な感じです」
「・・!!　何か、危険が？」
「いえ…うーん、…まだやるべき事…があるのかな？」
「…？？」
青年はケロリと言い、長は手を止めてその後を待った。
巫女が近寄って来た。
「どうされたのですか？」
「ああ、…ここじゃないんだ…」
カワセミは顔を上げた。
「長、闘牙の馬に巫女を乗せて、ボクの後に着いて来て下さい」
こういう時は下手に疑問を投げ掛けちゃ駄目だ。当のカワセミにだってよく分かっていないのだから。
「…？？…」
しかし、カワセミの降り立ったのは、蒼の里の馬繋ぎ場だった。上空で長は躊躇する。

「長様、私は……」
巫女が長の懐で強(こわ)ばった。人間の身で里へは足を踏み入れないと、自らに徹しているのだ。
下でカワセミが、降りるように何度も合図している。
「巫女殿…里に人間が入るのは、特別な事ではないのですよ。旅人や怪我人を受け入れる事もよくあるのだから」
蒼の長が優しく説得する。巫女にとって、そういう問題ではないのは分かっていたのだが。自分は人間だ…と、ケジメを着けていたいのだ。

「巫女ちゃん?」
「巫女殿」
両脇に、ツバクロとノスリが乗馬姿で現れた。
「僕達も一緒に降りてあげるからさ」
「大丈夫、行こうぜ」
巫女は唇をキュッと結んで頷(うなず)いた。
地面に降り立つと、三々五々、里の者が凝視している。巫女は長の陰に身を縮めた。
「貴方達…、何か知っているのですか?」

「いや、二人が戻って来る頃だなあ…って空を見てたら、巫女ちゃんがいて、戸惑っている風だったから」
「どういう経緯です? 長」
「カワセミがね…、…カワセミは何処です?」
見ると、カワセミは、路地の一つで手招きをしている。
「……行きましょう、彼自身も、何かに導かれているんです」
長は巫女の肩を抱いて支え、二人の青年が両脇に付いた。何人かの古い大人が、これは何事か…?と話し掛けて来たが、長は、理由は後でとあしらった。
角々でカワセミは手招きし、里の奥の人気(ひとけ)の無い場所に出た。その更に奥の古ぼけた小さいパオの前で最後の手招きをし、水色の髪はスルリと中へ消えた。
長は息を呑み込んで止まった。
「ここは…このパオは……」
「長様…?」
長は巫女の肩を両手で支え、自らも意を決して中へ入った。二人の青年も顔を見合わせて後に続く。

真っ暗だ。ツバクロがランタンを灯した。

馬具置き場になっている。
「……」
カワセミが真ん中に突っ立っている。
「カワセミ……おーい、戻ってるか？」
ノスリが目の前で手をヒラヒラさせた。
「…うん……何でここへ来たのかな？　呼ばれた訳でも惹かれた訳でもない。長、ここ、何処なんです？」
「何処って、馬具置き場だろ？　ね、長…？」
ノスリは長を振り向くが、今度は長が、在らざる物を見るように茫然と室内を見回している。
「イルアルティ…？」
巫女は久し振りに名前を呼ばれて、ピクッとした。
「はい…？」
「貴方、幾つになりましたか？」
「え？　来月の初めで、十六になります」
三人は、巫女が思ったより年若かったのに、びっくりした。
「そうですか…。人間の所へ行った日を誕生日にしているんですね。私もすっかり忘れていました。貴方…本当はね、今日で十六になるんですよ」
「えっ…!!」
「十六年前の今日、此処でこの世に生を受けたんです。貴方のお母さんは、このパオの中で貴方を産んだんですよ」
＊＊＊
巫女は両手で口を抑え、三人の青年は目を見開いた。
「馬具置き場で生まれたの？　西洋の神サマみたいだね」
カワセミがのどかに言った。長が噴き出して、ちょっと緊張が解けた。
「その頃は産屋として使われていたのですよ。アル・カンシラは保護されてから、ずっとここで臥せっていたのです。命の灯はとても細い物でしたし、静かに過ごさせてあげようと…。存在を知っていたのは、オタネお婆さんと医療関係の何人かだけでした。貴方達も小さかったですしね…」
「赤ん坊の時、里に一緒に居たんだ。…不思議な感じだね」
ここへ導いた当のカワセミは、呑気に辺りを眺めた。
「ここに住めって事かい？」
ツバクロの言葉に、巫女は間髪入れず首を横に振った。ツバクロもノスリも、巫女が里に住むのなら、出来る限りのフォローはする気でいる。しかし彼女を傷付けるモノから完璧に守り

切る事は出来ないだろう。まだ人間の家族の元にいる方がいい。
「長、どう思います?」
長はまた、心がどこかへ行ってしまったみたいに、ぼおっと中空を眺めている。
「長・・!!」
「あ…ああ、はい…」
「どうしたんですか?」
「ああ、大丈夫ですよ…。色々…思い出していたんです…」
「……」
巫女は部屋の中を見回すが、十六年も前の痕跡は見付けようがない。ただ、誕生日に、生まれた場所に来た。何か意味があるんだろう……。
「あっ!…まただっ!」
カワセミが小さく飛び上がった。
「んと…んーと……」
みんなカワセミを待つ。
「移動!!」
カワセミは外へ飛び出した。
「お…おーい」

四人はカワセミを追い掛けて、また馬繋ぎ場へ出た。
馬装が解かれた裸馬に、カワセミは構わず飛び乗って舞い上がった。三人も慌てて頭絡だけ掛けて、後を追う。
カワセミは星も無い真っ暗闇の中、ハミも手綱も無い馬のタテガミを掴んで強引に馬を駆り、迷う事なくある一点に降下した。

今度の場所は、イルアルティも知っていた。丈の高い草の中にあるハイマツの小高い丘…。
四頭の草の馬は　その頂上に降り立った。
「……」
カワセミは一番高い所に立ち、ぼぅっとしている。ツバクロとノスリも辺りを見回すが、ただただ闇があるばかりだ。
長に降ろされた巫女は、暗闇の中を、二つの玉石の積まれた場所へ歩いた。しゃがんで石を撫でる巫女に、二人は近付く。
「それ……」
「お母さんのお墓です。以前長様に連れて来て頂きました」
長は離れた所で巫女を見ている。
「あっそうか!!」

やっとカワセミが何かに行き当たった。
「巫女は今日、ここで名前を授かるんだ!!」
みんな度肝を抜かれた顔をした。巫女はバランスを崩して尻餅を付いた。
「そっそんな……私なんかが……」
「だって、もう決まってるんだもん！ おっきい流れの中で！」
長が巫女の側に来た。
「私なんか…などと言ってはいけません。私の自慢の『娘』が」
『娘』は血ではなく、心で繋がった娘だというのは、皆知っている。
ツバクロとノスリは、両方から手を貸して巫女を立たせた。
「じゃあ、長…」
「ちが――――うっ!!」
カワセミは片手を上に掲げた。
「名前はボク達三人が授けるの!! 二人ともここへ来て!!」
二人は長を見た。長は戸惑いつつも頷いた。本当はちょっぴり自分で名付けたい気持ちはあった。
二人は巫女を伴って丘を登った。
「名前……考えなくちゃね」
巫女は茫然と、されるがままだ。
「名前はもう、大昔から決まっているんだもん!!」
カワセミは片手を上げたまま続ける。
「お…おい、カワセミ…」
「キミの名前は、カタカゴ！ …カタカゴの君…！」
「おいカワセミ、巫女殿の服の柄じゃんか。安易すぎだろ」
「ねえ、長……長？？」
ツバクロもノスリも、離れた所に立つ長を見て、固まった。
長は張り付いたように立ち尽くしていた。ついぞ見た事のない……一筋の涙が、その頬を伝う。
「・・・カタカゴ・・・!!」
二人はどちらからともなく頷いて、カワセミの両脇に登り、掲げられたその手に自分達の手を重ねた。
大昔から、決まっていた名前なんだ……。
「湖の巫女……貴方の名前は、カ・タ・カ・ゴ……大地と風の護りと共に、この名を貴方に授けます・・」
三人の手が重なったまま降りて、巫女の額に触れた。
瞬間、風が渦巻いた。強風が龍のように駆け抜け、雲を散らし、一瞬で辺りは満天の星々に照らされる。

「……」
皆、凍りついたように空を見上げる。白鳥座も見える。
「…お母さん……!!」

巫女はやはり湖の畔に帰った。
名前を授かった事で、あやふやだった立ち位置が定まった気がする。信念に加えて自信が生まれた。更に強く生きて行けるだろう。
「最初パオの方へ行ったのは…イルの為だけでなく、貴方達…私も…皆がイルの存在をちゃんと受け止める為だったのではないでしょうか？　ソレを経ないと、名前を授ける資格が生まれないから…そんな気がします」
巫女を送って帰る道々、眠ってしまったカワセミは、小さく口を開けて長の懐に寄り掛かっている。
「まったくこいつは…いきなり名前が降りて来るんだもんな」
「長…カタカゴって名前は…？」
「ああ、あれね…、…良い名前ですね…」
「長……」
「……大昔…事情あって名乗れなかった彼女の母親に、私が勝手に付けた名前です…」
長はまた目の前に無いモノを見ている感じになる。
「……どんな方…だったんですか…？」
「ん？　ああ…貴方達が巫女殿に抱いている気持ちと、同じような気持ちを抱かせてくれる女性(ヒト)でした……」
「……」
二人はそれ以上聞かなかった。
以前、長に、何故妻帯しないかと聞いたら、子供が大変な思いをするから…って答えが帰って来た。それもあるだろうけれど、別の理由の方が大きいのかもしれない……。
星空を静かに飛ぶ四頭の馬は、丁度白鳥座の羽根に包まれているようだった。

～おしまい～

二〇〇九・九・某